

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百五十七回 マルクス・レーニン思想の破綻（その七）

南出喜久治（令和6年12月1日記す）

【マルクス主義の本質 その3】

このやうに、物質代謝といふマルクスの唯物論的な労働の捉へ方では、サービスとかエネルギーを認識することができないのである。

石炭（物質）を燃やして蒸気機関（物質）を動かし、その結果、工業製品としての商品（物質）を作るといふ現象を、物質代謝といふ物象化した点だけを繋いで見て判断することは、木を見て森を見ずである。

石炭と蒸気機関と工業製品といふ、点と点の間には、エネルギー転換が行はれてゐることによつて繋がつてゐることを知りながら、それを唯物論といふ教条主義を維持するために無視してきたのである。

唯物論といふ一種の宗教者であつたマルクスは、科学をする目を塞いでしまつたのである。これがマルクスの唯物論の致命的な誤りだつた。

物質的生産力の発展に従つて歴史が発展するといふマルクスの史的唯物論といふマルクスの理論も完全に破綻し、それによつて成熟した資本主義の世界において革命が必然的に起こるとするマルクスの予言も外れた。

唯一、窮乏化理論の予言が当たつたといふ者が居るが、それも誤りである。

マルクスの分析は現在の格差の原因の分析とは大きく異なつてゐる。結果的に窮乏化したから、予言は当たつたとするのは、余りにも乱暴である。

害悪を増幅する自由貿易をマルクスは奨励してゐた。奨励するといふよりは、自由貿易を放任し、それを容認して、それによつて革命が起こることを切望してゐたといふのが正確な評価である。

しかし、自由貿易が徹底したから窮乏化したのではない。金融資本主義による賭博経済が蔓延したことによつて窮乏化したのである。賭博は労働ではないのである。

マルクスは、資本の蓄積は労働の剩余価値の集積であるとしたが、現在の経済格差は、賭博経済といふ物質代謝とは全く無関係なものが齎したものであつて、労働が齎したものではないからである。

そもそも、通貨制度を考察しなかつたため、現在ではMMTといふ新自由主義が生み出したあだ花の理論に対して、マルクスの理論は全く無力である。

資本が自己増殖意思の主体として、資本家はその奴隸になつてゐるといふ分析は正しいが、それならば、その増殖行為が最も猖獗を極める賭博場（証券取引所、商品取引所、為替取引所など）を閉鎖せよとはマルクスは言はなかつた。実体経済だけが経済であると思ひ込んだ愚かさは致命的である。

また、資本家が資本自身の自己増殖意思の奴隸となり、労働者はその資本家の奴隸であるとするのであれば、資本は「G o d」といふことになる、つまり、資本主義は、資本をG o dとする世界宗教であり、その棄教を果たさなければ、人類の平和と幸福は実現しないと宣言すべきだつたのであるが、そんな認識は全くなかった。

宗教はアヘンだと言ひながら、資本こそアヘンだと言はなかつた。否、そこまでの分析が出来ない無明のために言へなかつたのである。

マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』の冒頭には、「ヨーロッパに幽霊が出る－共産主義という幽霊である。」とある。G o dといふ資本に対抗する共産主義は、その後、世界に混乱と殺戮を生み出した「幽霊」であつたことを予言したことだけの予言は当たつたのである。

そもそも、物々交換の煩雑さと不便さを解消するために自然発的に生まれた貨幣は、直接的な物々交換を間接的に行ふ中間的な媒介物であり、生産者と生産者とが物々交換を広く行ふための手段であつた。

さうすると、この貨幣（通貨）の発行権は、生産者自身に帰属することになる。そのため、生産者同士が互ひに共通の価値物として認め合ふ「商品貨幣」（物品貨幣、貨物貨幣、實物貨幣、commodity money）をその媒介としても通貨として採用した。

ところが、いつの間にか、資本家によって人々の通貨発行権は篡奪され、特定の者が通貨発行権を掌握することになつた。それがF R Bや日銀などの中央銀行を詐称する組織なのである。

マルクスは、この通貨発行権の帰属、通貨発行利益の帰属などについての知識が全くなかつたのである。